

Study Kagoshima Short Stay Program 2011 (平成 23)年度プログラム実施報告書

大嶋 眞紀

(プログラムコーディネーター)

内容の概略

- 1 プログラム概要の決定
 - A 日本語レベルの設定とプログラム内容の検討
 - B 広報・募集・受付状況
 - C 受講者確定前後の状況
- 2 実施状況
 - A 受け入れ・オリエンテーション
 - B 日本語演習
 - C 英語による講義
 - D 日本人学生チューターによるひらがなセッション等
 - E フィールド・トリップ
 - F その他の活動及び修了式
- 3 結果と展望
 - A 学習状況
 - B 受講者によるプログラム評価
 - C 目標達成及び展望

(作成資料等)

- ・募集要項/配布資料/到着時アンケート/スタディ・レポート
- ・日本語テキスト/学生の日本語レポート/DVD

1 プログラム概要の決定

平成23年度、JASSOによるショートステイ・ショートビジット推進の政策が提案され、留学生センターからもショートステイの提案を行うことがセンター連絡会議で了承された。企画の名称は「Study Kagoshima Short Stay Program」とし、受講対象者を海外の協定校数校から募ることとした。具体的には、米国3名、中国・韓国3名、その他のアジア諸国から3名、それ以外の国から1名という枠を申請し、各地区の主要な協定校から、日本語の未習者を募ることとした。奨学金が8万円支給されること、期間は8月の後半12日間とすること、などを連絡会議で確認した。JASSOへの申請書には実施委員会を設けることや、構成メンバー、具体的なスケジュールまで付記した。コーディネーターは

留学生センター長が務めることとなった。以下に、P D C Aサイクルの考え方にに基づき、企画、実施、評価、改善と展望についてまとめる。

A. 日本語レベルの設定とプログラム内容の検討

はじめに、日本語のレベルについて議論をしたが、結論としては日本語未習得者に限定することとした。これは既習者の場合、様々なレベルの応募者が予想され、統一的なクラスの開講が困難となることが予想されたためである。結果としては、このようなレベル設定は、韓国からの応募を難しくしたが、その他の地域からの応募を容易にしたと思われる。

平成23年度6月より、コーディネーターを中心に、プログラムの具体的な内容を確定した。日本語入門クラスを期間中15コマ開講し、修了者には1単位を与えることや、鹿児島についての英語による講義を5コマ設けること、フィールドトリップを3回行い、またオリエンテーションや修了時の行事などの確定を行った。また留学生2人につき1名の日本人学生チューターを配し、日常生活で事務職員とともにサポートする体制を構築した。

8月のプログラム実施に備え、日本語教材の作成、受講生のスタディ・リポート、チューター報告、プログラム評価などのフォーマットも確定していった。またコーディネーターは英語による講義担当教員との連絡調整もすすめた。

B. 広報・募集・受付状況

広報は、J A S S Oの採択が確定した6月24日から開始した。ただし、募集期間が2週間ほどしかないため、協定校への一斉通知はやめ、募集予定地域に居住するキーパーソンを通じて、協定校にアナウンスする形をとった。この手法の是非についてはのちほど総合的に論評することにした。

米国枠として3名募集し、キーパーソンを通じて広範囲に広報活動を展開した結果、問い合わせが8件、応募が4件あり、3名を選考したが、最終的にはそのうち2名が辞退した。辞退の理由は学期の開始と重なったこと、また航空運賃が高額であることなどがあつた。

中国、韓国枠として3名募集、6名の応募があり、うち5名を選考した。これは結果的に、米国枠の辞退分をあてたためである。

その他のアジア圏として、3名募集し、インドから5名応募があつた。その他のヨーロッパ枠も1名募集したが、応募がなかったため、その分も含め、4名を選考した。

C 受講者確定前後の状況

結果として、最終的な合格者は、米国1、中国4、韓国1、インド4で計10名の学生が来学することが最終的に決定したのは7月22日である。応募締め切りは7月10日であつたが、辞退者などがあり、調整は困難であつた。

また来日が確定した10名の学生中、ビザを要する中国、インドからの留学生が8名おり、それぞれ invitation letter 及び、コーディネーターの身分証明などを必要とする国もあり、EMSでの送付に追われた。学生には受け入れ通知を送る時点で、こちら側のオファーを受け入れるかどうかの意志確認、旅行予定の詳細などを求め、受け入れにいたるプロセスは単純ではないため、以下にまとめておく。

- 募集要項(brochure)の送信
- 学生等からの問い合わせ
- 学生の応募 (application)
- 応募締め切り
- 選考
- 選考結果の通知
- 留学の意志確認 (offer acceptance)
- 旅行計画 (travel details)の確認
- 招聘状の送付 (invitation letter) : ビザを要する中国・インド
- コーディネーターの身分証明書の送付 (certificate of the coordinator and guarantor) : 中国

結果的には、JASSOへの申請時の枠通りの採択というわけにはいかなかったが、人数の確保は実現した。また日本語能力をゼロレベルとしたことも、予定通りに実施可能となった。

2 実施状況

A 受け入れ・オリエンテーション

受け入れ対応は事務局とチューターが分担する態勢をとった。四か国からそれぞれ到着時間等も異なり、早朝にバスで到着するなど情報も錯綜し、必ずしも予定通りの展開とはならなかった。到着時の受け入れについての詰めの協議は前後3回以上、コーディネーターと事務、チューターなどが打ち合わせを行ったが、それでも在学生による出迎えなど予定外の設定が発出国側からも行われ、しかもその連絡が行き届かないなどのハプニングが生じた。結果的には全員、無事宿舎に到着できたが、次年度以降、受け入れ体制のさらなる検討が必要であろう。

オリエンテーションは初日に2時間実施された。関係者挨拶、担当教職員の紹介、チューター、留学生の自己紹介、プログラムの概要説明、奨学金給付、写真撮影ののち、大学・鹿児島市・鹿児島県の紹介を関係教職員が分担する形で行った。使用言語は英語のみで通訳等は介さなかった。オリエンテーションでの配布資料は添付する。

B 日本語演習

12日間を通じて日本語演習を15コマ開講し、テスト等を実施して達成状況に応じ、1単位付与することとした。単位換算については既存のスタディ・ジャパン・プログラムの履修規則に準拠するものとし、プログラム修了後の留学生センター運営委員会で単位認定を行い、単位認定証明書は本国に送付することとした。入門レベルの授業を1日1または2コマ、連続開講することについては、本プログラムへの応募者が必ずしも日本語学習を主目標とはしていないため、懸念も多かったが、実際に開講してみると、それは杞憂であった。日本語担当のコーディネーターのもと、担当講師2名が入念に導入項目等について準備、打ち合わせを行い、またこのプログラム専用のテキストを編纂するなどの努力が功を奏し、受講者は全員、日本語学習に強い意欲を示し、連日、語彙を増やし、会話力を増していく状況が傍目にもよくわかるほどであった。テスト勉強も含め、全員が毎日帰宅後も2時間は勉強しているとの報告もあった。

プログラム半ばに実施された花火大会への参加時も、学習者は市民に積極的に話しかけるなど、言語的にも文化的にも適応力の高い学習者であったといえよう。

C 英語による講義

英語による講義は、異文化理解2コマ、鹿兒島の医療事情、日本語概論、鹿兒島の自然環境をテーマとした。日本語概論のみは90分としたが、その他の講義は50分としたため、時間的には不足がちであった。異文化理解は、日本で生活する上での「マナーと習慣」「鹿兒島の歴史地理入門」をテーマとした。「マナーと習慣」では、挨拶の仕方、名刺交換の仕方、贈答の習慣、パーティーの進め方、訪問の仕方、飲食のマナー等、すぐに応用できる内容に限り、実演させるなど、手法に工夫を凝らした。「鹿兒島の歴史地理入門」は、そのすぐあとに歴史博物館の訪問を組み合わせ、事前学習となるよう設定した。医療事情については、日本の健康保険制度の説明とともに各国の状況について話し合うなど、他国の医療状況についての理解を深めた。日本語概論は、学習している日本語の全体像が少しでも見えるように、多角的に導入する内容である。「鹿兒島の自然環境」は、地球の中の鹿兒島という位置づけで、気象条件、植生、動物相など、地球の変動に関連させた鹿兒島の特徴についての講義が行われた。学習者の理解力、態度等良好であったという。学習者は10名中4名が理系、あとは国際経済を専門とする学習者と英語専攻の学習者であったが、全員がどの科目にも積極的に興味を示す傾向が強く観察され、大変まとまりのある学習者群であった。

D 日本人学生チューターによるひらがなセッション等

ひらがなについての教え方の講義をチューター対象に事前に行った上で、留学生とのマンツーマン学習を行った。回数は1回であったため、ひらがなの導入程度ではあったが、

担当した日本人学生チューターからもこの日はじめて留学生と積極的に話すことができたなどとの報告もあった。その後のフィールドトリップ等での相互交流が活発に行われる基礎となった。

E フィールドトリップ

予定していたフィールドトリップは、町歩きプラス花火大会見学、事前講義ののちの歴史博物館見学、そしてシティ・ビュー・バスによる市内見学で神社、展望台等をまわった。いずれも日本人学生チューターも同行し、多人数による移動見学にも関わらず、集団での行動もとれ、また適宜補足説明がなされるなど、様々な角度から参加留学生は知見を深めることができた。

F その他の活動及び修了式

その他に学生食堂へのガイダンス、大学内の実験施設等の見学、さらには研究室訪問なども組み合わされ、修了式では、留学生による日本語での自己紹介及びプログラムの感想の発表、また日本語演習の成果及びスタディ・レポート等の提出、活動状況を撮影したDVD映像を視聴するなど、各種の活動が組み込まれ、教職員、チューター等が同席する中、最後のとりまとめを行った。

3 結果と展望

A 学習状況

(1)「スタディ・カゴシマ・ショートステイ・プログラム」の実施にあたり、参加学生に、到着時のアンケート調査を行った。この調査は日本、鹿児島に対する事実認識、印象等を問う簡単な内容で、結果は以下の通りである。

- ・参加学生 10 名全員がはじめての渡日であった。
- ・日本に対する第一印象：清潔、美しい、システムティック、親切、優しい、東京は大都市。
- ・鹿児島に対する第一印象：静か、きれい、人々は親切、鹿児島は海の街、大学都市。
- ・日本語を学ぶのは 2 名を除いてはじめて。2 名もごくわずかの体験のみ。
- ・日本語はむずかしそうだという人が 7 名、簡単そうだという人が 3 名。
- ・日本人と接するのは一人を除いてみな、はじめて。どんな印象かという問いに対し、親切、丁寧、謙虚、やわらかい、はずかしがり、静かという答え。
- ・英語は通じるかという問いに対し、3 人が否と答え、残りの 7 人は多少通じるという答え。

事実認識については以下の質問に回答してもらった。

- ・首相の名前：1 人を除いて、知らないという答え。

- ・与党：2人のみ正解。(選択肢を与えた)
- ・伝統的スポーツ：すもうとサッカーと答えた2人以外は回答なし。
- ・伝統芸能：歌舞伎と漫画以外は回答なし。
- ・ノーベル賞受賞者数：1～5人が二人。11～15人が一人。他は無回答。
- ・伝統料理：すし、そば、すき焼き、てんぷら、などの回答あり。
- ・東日本大震災の被災県：北日本、福島という回答以外は回答なし。
- ・鹿児島市の人口：1人のみ60万人と正解。他は回答なし。

(2) ショートステイ12日間の学習、生活を通じて何を学んだか、参加学生の意識変化はどうであったかを確認するため、スタディ・レポートの提出を義務づけ、プログラム開始時から参加学生は記入を開始し、最終的にはつぎの海外留学への意欲等も含め、本プログラムの意義について参加学生がどのように捉えているかを明らかにしようと試みた。以下にその結果をまとめる。

a. プログラム1週目の記録

活動項目について自由記述をしてもらった。

- ・ オリエンテーション：暖かい歓迎を受けた。わかりやすかった。みんな熱心でランチまで付き添って、注文の仕方なども教えてくれた。配慮が行き届いていた。パワーポイントが長すぎた。もっと短く直接的なやり方がいい。
- ・ 日本語演習：日本語クラスに出席するのは楽しかった。教え方がすばらしく、そのため、日本語にいつそう興味をもつようになった。日本語を学ぶことなど予測もしていなかったが、教育方法は過去に体験したことがないすばらしいものだった。丁寧な挨拶表現など、とても勉強になった。暗記よりも視覚的な手法がよかった。クラスが愉快で活気があった。スピードもよく、大いに楽しめた。
- ・ 異文化理解：基本的な地理感覚、習慣とマナーなど役に立った。また日本への敬意が高まった。日本理解が深まった。理論と実践が融合していて役に立った。
- ・ ひらがなセッション：助けになった。学生の援助がよかった。ユニークな体験だった。
- ・ サマーナイト見学：興味深く、美しかった。大勢の市民とともに過ごしたことがよかった。このような体験は自分の人生で初めてのことであった。着物を着ている人をたくさん見たのも印象的。

b. プログラム2週目の記録

- ・ 医療事情というトピックについて刺激を得た。保険制度について学べるよい講義であった。他国の状況もわかった。ちょっと難しかったが、大変役に立った。
- ・ 大学の施設見学は興味深かった。施設の充実ぶりを知ることができた。講師は親切に説明してくれた。
- ・ 日本語講義も役に立った。日本語の音声に興味をもった。

- ・ 日本語演習は講師の様々な手法により、いっそう興味深くなった。
- ・ 異文化理解により歴史の概観を知ることができ、見学に役に立った。明治維新について把握ができた。
- ・ 維新ふるさと館の見学により、日本の歴史にさらに興味をもつようになった。また自分たちの目的意識について考えさせられた。薩摩藩英国留学生の話は自分たちと重ねあわせることができ、感動した。上演ドラマはいろいろなことを考えさせてくれた。大変教育的な内容であった。
- ・ 鹿児島の自然環境について詳しくなった。たくさんの情報を得た。人類の起源などについても考えることができた。地震や、海についての最新の研究成果なども印象深かった。

c. 総論

この部分では、4つの質問に回答してもらった。

このプログラムに参加したもともとの理由は何か？

日本を訪問したいと前から思っていた。言語文化を知ること、実験室での新しい技術を知ること、視野を広げること。日本について、鹿児島大学について、文化や生き方を知りたいと思った。指導教員がすすめてくれた。日本語を学び、友だちを作り、異なる文化を体験したかった。

実際にこのプログラムに参加して何を得たか？

このプログラムに参加できてよかった。日本語を学ぶことができたし、他国の学生と知り合うこともできた。この滞在は忘れがたいものとなるだろう。ライフスタイルや時間の処理の仕方、助け合う文化などを知った。英語に自信がなかったけれど、友だちも作れた。日本語に本当に興味が持てるようになったので、中国に帰っても継続するつもりだ。たくさんの友だちを作ることができたし、日本の文化と歴史にいっそう興味をもつようになった。

日本と鹿児島について、参加前後で受けとめ方はどう変化したか。

あまりよく知らなかったけれど、参加後は、日本と鹿児島は美しいところと思った。人々は丁寧で親切、行儀がよく、日本も鹿児島も大好きになった。一生のうち、またぜひ来たい。日本はすばらしいと人々が言うのを聞いていたが、実際来てみてそうだった。空港に着いたとき、日本語が一つもわからなかったのが、15日も過ごすのは大変だろうと思ったが、クラスが始まってみると講師はとても助けてくれて、すぐに難しくなくなった。日本人は時間について優れた意識を持っている。日本での生活の仕方はすばらしく、たくさんのお話を学んだ。これから自分の生活に応用したい。正直に言うと、日本についてはじめは抵抗感があったけれども、このプログラムに参加してそれは消え、今はまた日本で勉強したいと思っている。日本人のゴミ処理は印象的で、清潔な国であることがよくわかった。宿舎でゴミの分別は徹底していた。日本人は思っていた以上に友情に溢れていた。19世紀後半に鹿児島が果たした役割をよく知ることができた。日本について何も知らな

ったし、日本全体が被災したと思っていたけれど、みんなが端的に行って、無事に暮らしているのを見ることができた。

この体験を自分の将来や留学にどう結びつけるか？

5年以内に、Ph.D.を鹿児島でやりたい。実験施設がすばらしく、日本語も思ったほど難しくなかった。鹿児島で生活した経験が大変役に立った。教授は知識が豊かで、勉強し、夢を実現するのに最適の場所と思った。もし博士課程に進む機会がここで得られたら、ぜひ戻ってきたい。また日本に来たいと思っている。日本以外は考えられない。日本語の勉強を継続し、また自分の国に他国の人が来たときはもっと注意を払うようにしたい。新しい文化に接したときに大切なことは異文化に適合することだと思う。いろいろな国の人たちと仲良くなれて幸せな2週間を過ごせたことは忘れがたいし、また近い将来、日本を再訪したい。ビジネスをしていく上で、日本人とコミュニケーションがとれると思う。

以上が学生の本プログラムによる学習状況である。最後に帰国直前の簡易なアンケートでは10名全員が将来の日本留学を希望し、またその希望地は鹿児島と回答した者が7名いたことをつけ加えたい。

B 受講者によるプログラム評価

プログラム修了時に、受講者によるプログラム評価を実施した。受け入れ体制から、プログラムの内容、その他、以下に掲げる項目について、4段階評価を行った。以下にその結果を掲載する。

(回答者数10名)

項目	Excellent (大変よい)	Good (よい)	Fair (まあまあ)	Poor (よくない)
応募時情報提供は十分だったか？	8	2		
応募時手続きはスムーズだったか？	9	1		
到着時スタッフとのコミュニケーションは？	7	3		
空港等の出迎えはよかったか？	8	2		
奨学金支給はスムーズだったか？	10			
宿舎設備は満足できたか？	9	1		
宿舎の運営、支払い等はよかったか？	9		1	
スタッフからの生活情報提供は十分だったか？	5	4	1	

チューターからの情報提供は十分だったか？	5	4	1	
オリエンテーションは役に立ったか？	6	4		
日本語演習内容はよかったか？	8	2		
日本語演習方法はよかったか？	10			
日本語教員の資質は十分だったか？	8	2		
英語講義内容はよかったか？	5	4	1	
英語講義方法はよかったか？	5	5		
フィールドトリップの運営はよかったか？	9	1		
フィールドトリップの企画内容はよかったか？	7	3		
その他の活動はよかったか？	10			

(その他の記述)

- ・ このプログラムを大いに楽しんだ。日本の言語、文化、鹿児島についてたくさん学ぶことができた。講師、チューターともに大変親切だった。
- ・ 日本語のテストはもっとむずかしくてもよかった。日本についての英語文献をもっと紹介してほしい。
- ・ また近い将来、鹿児島に戻ってきたい。
- ・ 大変よいプログラムで、日本と鹿児島を知るのにほかの学生にもすすめたい。

プログラム評価の分析

応募時情報の提供等は、募集期間が2週間しかなかったため、かなり錯綜したが、協定校側のキーパーソンを通して可能な限り迅速に情報提供を行った。到着時のコミュニケーション等に多少問題があったのは、出迎えのアレンジがミスマッチを起こしたり、飛行機の延着など、多少のハプニングがあったためと解釈する。スタッフ、チューターからの情報提供については、使用言語の問題があったかもしれないと推定される。オリエンテーションはすべて英語で実施したが、連絡ミス、あるいは長すぎるなど、次年度以降の調整が必要であろう。日本語演習の評価は総じて高いが、英語による講義は評価が低めで、内容の検討が必要である。またフィールドトリップは大いに楽しんでいたように見うけられたが、それでも予定外の招待や食事会などがとくに2週目は多すぎたため、受講生の疲れが多少目についた。それでも全体としては満足度が極めて高かったことは疑いをえない。短期間ではあったが、教職員、チューター等が全力投球した結果であろうと思われる。留学

生と日本人学生チューターとの交流も想定以上に活発に行われた。

C 目標達成及び展望

以下のような目標を設定し、大方達成できたと考える。しかしながら、継続的な学習意欲の維持については今後の動静を見る必要がある。日本語学習の基礎や地方都市鹿児島の長短を幅広く知ったことは、彼らのその後の学習や人生設計、価値観の構築に大いに役に立ったとは本人たちから耳にしている。

日本語学習の基礎を知る。

日本文化、鹿児島の自然について知見を深める。

日本人との交流を深化させる。

日本人の生活態度、価値観を知る。

今後の課題と展望としては、募集期間を余裕を持って設定すること、ショートステイプログラムの企画内容をさらに精査すること、実施体制の一層の強化を図ることであろう。協定校の担当者からはすでに次年度以降への期待、問い合わせもあり、また帰国した受講生からの肯定的なコメントも多数寄せられている。今後の展開が大いに期待できるプログラムである。

最後に、スタディ・カゴシマ・ショートステイ・プログラムの実施体制の要となった教職員、日本人学生チューター等による本プログラムの維持展開への尽力を高く評価するとともに、本プログラムの実施を支援してくれた鹿児島大学、またプログラムを採択してくれた日本学生支援機構にも謝意を申し上げる。

作成資料等

- ・各種資料（募集要項・配布資料・到着時アンケート・スタディレポート）
- ・教材ほか（日本語テキスト・学生の日本語レポート・DVD）

大嶋 眞紀（文責）
（鹿児島大学留学生センター長）